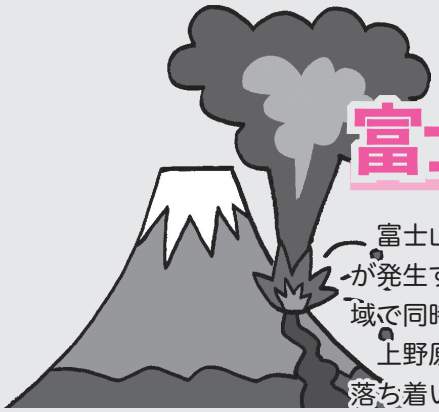
防災・減災について考えよう vol.49　問 危機管理室（☎62-3145）



富士山の噴火現象を知ろう！

富士山が噴火すると「噴石（ふんせき）」「溶岩流（ようがんりゅう）」「降灰（こうはい）」をはじめ、さまざまな噴火現象が発生する可能性があります。しかし、これらの噴火現象は、影響範囲全ての地域で同時に発生するわけではありません。

上野原市に影響する噴火現象を正しく知り、行政機関が発する情報に注意して落ち着いて行動しましょう。

上野原市に影響が想定される噴火現象		市と住民の対応
溶岩流（ようがんりゅう） 	火口から噴出したマグマが重力によって地表を流下する現象。富士山の溶岩流の温度は、1,200度程度と高温であり、溶岩流の進路上にある家屋や道路を埋め、近くの木々を燃やす。流れの速さは温度などの条件によってさまざまであるが、通常は人が歩く程度、もしくはそれより遅い速さであり、流下状況に合わせた段階を踏んだ避難が可能である。 ※市には、7日～57日（最大）で到達	市への溶岩流到達が想定されるとき ●市の対応 溶岩流の流下状況を見て、溶岩流の影響想定範囲の地域に対して避難指示などを発令 ●住民の対応 原則、立ち退き避難
降灰（こうはい） 	噴火によって火口から上空に放出された火山灰が空高く吹き上げられ、風に乗って遠くまで運ばれた後、地表に降下する現象。火口の近くでは厚く積もり、遠くになるにしたがって徐々に薄くなる。多量の降灰があると、屋根に積もった火山灰の重みで木造の建物などが倒壊する可能性もあり、降灰堆積厚によっては、堅牢な建物への避難が必要となる。 ※市には、2～10㎝程度の降灰が予想される	噴火が発生し、降灰が確認または予想されたとき ●市の対応 自宅又は近隣の堅牢な建物内への避難の呼びかけ ●住民の対応 原則、屋内退避
降灰土石流（こうはいどせきりゅう） 	山の斜面に厚く積もった火山灰が、降雨によって高速で流れ下る現象。少量の降雨でも発生する可能性があり、また広範囲に流出するおそれがある。噴火で積もった火山灰が原因であるため、噴火が終わってからも、数年間は土石流が発生しやすい状態であり、注意を要する。噴火によって10㎝以上の降灰が生じ、かつ時間雨量10㎜を超える降雨が生じた場合には、渓流付近から速やかに立ち退く必要がある。	国交省または県が行う「緊急調査」の結果、「土砂災害緊急情報」が発表されたとき ●市の対応 状況に応じて、土石流の土砂災害警戒区域に対して避難指示などを発令 ●住民の対応 原則、立ち退き避難

※上記の噴火現象は、火口の位置や風向きによるため、噴火後ただちに発生するわけではありません。